

梅花短大 ○家本 修 滋賀女子短大 成田巳代子

大谷女短大 小林昭子 樟蔭東女短大 山本倫子 鳴門教育大 広瀬月江

目的 衣服の色の嗜好性の形成において、母子間にどのような関係が存在し、影響を受けているのか、また、衣服の色の嗜好性はどのように形成されるのか、この構造はいまだに明らかにされていない。そこで、本研究は、まず母子間の衣服の色の嗜好性について類似性と相違点を、明らかにすることを目的に新たに調査を行った。今回の調査は、流行色の要因を軽減させるために、各年代について同時期に実施した。本報では、各年代別の母親の特性を把握しておくことを目的に分析を行ったので報告する。

方法 幼稚園児、小学生、中学生、高校生、短大生とそれぞれの母親を組にして、質問紙調査法による調査を実施した。幼稚園児は、面接調査である。調査方法：小学生から短大生は集合調査を、各母親に対しては託送調査である。被験者組数：幼稚園119組、小低学年434組、高学年570組、中学364組、高校545組、短大573組。調査地域：大阪府下（一部、兵庫県下、滋賀県下、徳島県下を含む）。調査時期：昭和63年10月中旬～11月中旬。調査項目：前回の調査結果（既報告）をもとに一部修正したものを使用した。調査手法も同様である。分析手法：本稿では、クロス分析、分散分析。

結果 ① 母親の年代は校種により高くなるが、同年代を比較すると職業以外、各項目とも順位相関係数が高いことから、年代別整合性は高いと考えられる。② 年代が上がるほど、「スポーティ」な服を好み、「紺」が増加する。③ 嫌いな色では、「オレンジ」「紫」が各年代とも出現しており、好きな色として「えんじ」が増加していく。④ 色調では、全体的に地味なものが好まれ、年代が上がると濃いものから薄い色へ移行する。